

英日逐次通訳とノートテーキング

－訳出時間に着目した考察－

松山 晶子

(ウィーン大学)

This paper is based on my doctoral research on consecutive interpreting (CI) and note-taking (Frey, 2007). Although many Japanese publications refer to the importance of CI and the interpreter's note-taking, only few empirical studies on that subject have yet been performed for the Japanese language. For my dissertation I conducted a consecutive interpreting experiment involving six professional Japanese interpreters rendering the same videotaped English speech. A quantitative and qualitative analysis of the data (interpretations and notes) yielded a rich set of findings. This paper deals with a specific aspect of the experimental corpus, namely the tendency of the Japanese renditions to be longer than the original speech. The factors responsible for this phenomenon are examined and the role of the interpreters' notes is redefined in the light of my findings.

1. はじめに

「逐次に始まり、逐次に終わる。」という言葉はよく耳にするが、逐次通訳やそのノートについての実証的な研究はまだ比較的少ないといえる。欧州言語では、同時通訳に押され、通訳者が逐次通訳を行う機会のごく稀になっている¹⁾。これに対して、日本語逐次通訳は依然として市場で高い需要があることから²⁾、教育的な意味だけでなく実践的な意味においても、逐次通訳研究の必要性は十分高いといえる。本稿の土台は、著者が2007年8月にウィーン大学に提出した博士論文である。以下では、その中でも訳出に要する時間という1つの観点を取り上げ、そこで観察された現象を検証・考察する。

2. 実験方法

日本語逐次通訳とノートの実態を把握するために、プロの英日通訳者6人を被験者

FREY-MATSUYAMA, Shoko, "English-Japanese Consecutive Interpreting and Note-Taking: A Study looking into the time needed for renditions." *Interpreting and Translation Studies*, No.8, 2008. pages 1-18. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

(以下 S1～S6) として逐次通訳の実験を行った。被験者は全て日本語を母語とし、英語を A または B 言語 (AHC 分類による) とした。実験に想定したのは、日本人学生を対象にした外国人講師による英語の講演における逐次通訳である。スピーチは、『 EU-現状と挑戦』をテーマにした情報提供型のもので、特に専門知識がなくても十分理解できる内容を選定した。原スピーチは現職大学教授が原稿をもとに行い、これを録画したものを再生使用した。ここで、自由発話ではなく、あえて原稿をもとにしたスピーチを採用した理由は、数字や列挙などノートテーキング技術上興味深いいくつかの項目をスピーチに盛り込むためである。原スピーチは、平均発話速度が 121 語/分で、43 秒から 3 分 19 秒の長さの異なる全 10 パートからなり、各パートの終わりには、話者が横にいる想定通訳者に訳出を始めるタイミングを知らせるために目で合図を送るようにした。なお、被験者には事前に講演で話される内容の概略が知らされた。

実際の逐次通訳実験は、2 日間にわたって大東文化大学の教室を借りて行われ、著者の他、AV 機器操作のための技術アシスタント 1 名と 3～4 名の学生が聴衆として参加した。聴衆はあまり英語を解さなかったため講演の理解には事実上通訳に頼ることになった。実験の間、2 台のビデオカメラが回り、1 台は各被験者を正面から、もう 1 台は、約 70cm の高さからテーブルの上の被験者のノートを捉えた (図 1 参照)。録画には時間も一緒に記録した。通訳実験後すぐ記憶の新しいうちに、別室で各被験者のインタビューと被験者によるノートの読解を行い、テープに録音した。通訳実験で得られた音声データは書き起こした上で、統計プログラムの SPSS に入力し、ノートのデータとともに様々な角度から定量的・定性的に分析した。映像データは、ノートのどの要素がどの時点で書かれたのか、どの順序で書かれたのかを確認するために利用した。

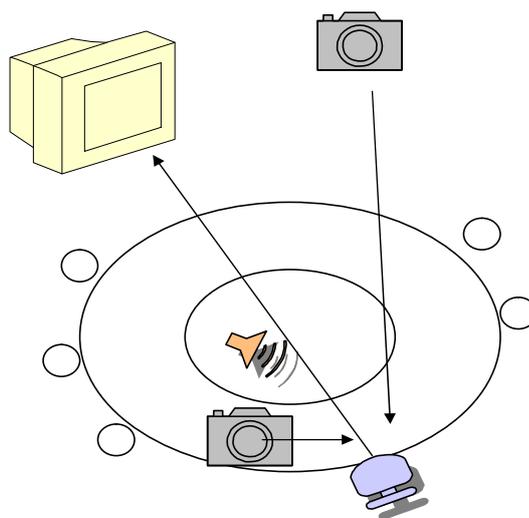


図 1: 実験配置略図

3. 結果と考察

3.1 訳出時間

実験データ分析の1つの結果として、日本語逐次通訳に要する時間が原スピーチよりも長くなりがちであることが明らかになった。原スピーチの長さと同様に被験者がそれぞれ訳出に要した時間を比較すると、全10パートからなる原スピーチで、原スピーチとほぼ同じか、それより若干短い時間で訳出した S3 を除き、他の被験者は全パートで原スピーチより長い時間を要していること、全体では約3分～11分ほど原スピーチより長くなっていることが明らかになった（表1参照）。

原スピーチの長さ	各被験者が訳出に要した時間					
	S1	S2 ³⁾	S3	S4	S5	S6
17'41	20'40	---	16'26	23'00	28'55	25'16
Δ	+2'59	---	-1'15	+5'19	+11'14	+7'35
対原スピーチ (%)	+17%	---	-7%	+30%	+64%	+43%

表1： 各被験者が訳出に要した時間

ここでもし、被験者全員が原発言より長い時間を要していたならば、日本語の特性上、英日逐次通訳では原発言よりも訳出に時間を要する、と結論づけたいところである。西山が指摘するように、子音の種類が少ない日本語は、同じ内容を表現するのに多くの子音を必要とするので、そもそも日本語への逐次通訳は英語の原発言より長い時間を要するということになる(1988:133)。例えば、米原もこれと同意見ではあるが、表現の工夫や冗語を省くことで、時間の短縮ができるとしている(1994/1998:237ff.)。もう一つここで喚起したい点は、原発言より長くなってはならないという逐次通訳の大原則である。Herbert (1952) は、通訳者は原発言の75%以上の時間を要してはならないとしている。少なくとも欧州言語における逐次通訳ではこれは意識されているといえる。米原も逐次通訳に要する時間を言及しているが、理想的には原発言が使った時間の80%、ぎりぎり許されるとしても100%としている(ibid.:237)。そこで以下では、日本語逐次通訳で訳出に要する時間が原発言よりも長くなる要因を詳しく検証していくことにする。

3.2 発話速度

訳出に要する時間は、無論、個々の通訳者の発話速度によっても影響される。この可能性を確認するために、まず被験者の発話速度を求めた⁴⁾。表2にその結果を示す。

	S1	S2	S3	S4	S5	S6
平均発話速度 (モーラの数/分)	459	439	458	445	340	429

表 2 : 被験者の発話速度

平均発話速度を見ると、S3 の発話速度は 458 モーラ/分で他の被験者と大差はない。逆に、S5 だけが 340 モーラ/分で、比較的ゆっくりと喋っていたことになる。例えば、S5 は原スピーチより合計 11 分余り長い時間を要したわけであるが (表 1 参照)、平均発話速度で喋っていたとしたら、これを 7 分は短縮できたことになる。逆に考えれば、訳出に要する時間に決定的なのは、発話速度の違いというよりも、発声したモーラの数、つまり、被験者が実際に喋った量といえる。ここで注記しておく、モーラ数は当然、情報量とも相関するが、S3 の訳出においては、ほとんど情報の漏れは見られなかった。表 3 を見ると明らかなように、S3 と比較して他の被験者は 27% から 47% 多く喋っていたことになる。そこで以下では、何が発話量を多くしているのか、その要因をカテゴリーに分類して詳しく検証していく。

被験者	S1	S2	S3	S4	S5	S6
モーラ数の合計	10104	9539 ⁵⁾	7433	10113	9454	10902
S3 と比較した 発話量%	+36%	+28% ⁵⁾	-	+36%	+27%	+47%

表 3 : 各被験者の発話量

3.3 訳出を長くする要因

3.3.1 冗語性

冗語 (redundancy) は、厳密には前述されたことの繰り返しを指すが、ここでは、原発言にはなく、訳出に見られる供述で、それが欠けたとしても、原発言で意図した意味が損なわれないものとする。被験者の訳出を詳しく観察していくと、こういった冗語の大部分は、通訳者が制限された時間の中で、不適切な表現で訳出を一旦開始し、訳出を続けながらこれを訂正することによって起きているようである。以下にその例を挙げることにする。

例文 3.3.1-1

Another issue which I would like to draw your attention to is a nuclear power plant in the Czech Republic that has recently been put into operation.

訳出 3.3.1-1: ... 実は、これは核..えー、燃料を使うことによって発電を行う、原発に

関しての問題です。えー、実は、隣のチェコ共和国に、えー、1つの、あの一、核、えー原子力、えー、発電所があるわけですね、

被験者のノートには、《nu cl》、《チェ共》、《そうぎょう》、《かい》という要素が見られる。訳出にあたっては恐らく nuclear から核という言葉が先に出て、原発という表現が浮かぶまでに時間を要したものと思われる。

例文 3.3.1-2

The imminent challenge facing the Union is, of course, its enlargement.

訳出 3.3.1-2: え、さて、それでは次に EU が直面する課題という話に参りますけれども、現在、そのヨーロッパ連合が、あ、直面しております最大の課題というのは、その拡大ということにあります。

例文は、第4パートの始まりで、EUの拡大という新しいテーマが導入された部分である。一旦訳出を始めたところで、これが「最大」の課題であるという情報が抜けていたため、これを後から補ったことにより直前に言ったことの繰り返しとなっている。ノートには、《the immi かだい》、《uni》、《は》、《もちろ》、《拡大》という要素が見られるが、訳出を始めた時には、英語で書かれたこの最初のノートの要素が即座に理解できなかったことが推測される。

冗語はまた、文やパートの初めに特に頻繁に観察された。被験者は、恐らくその時点ではまだノートを読解し、目標言語での表現を探っている状態であり、時間をつなぐ目的で原発言に影響のない中立的な内容を話したと考えられる。同様の現象が、プロに見られる通訳戦略として Kalina (1998) や Andres (2002) の研究でも観察されているが、間があくことなく滑らかな訳出を維持できる一方、訳出はその分長くなる。観察された文と文との間の冗語のほとんどが、多かれ少なかれその直前で話された内容の繰り返しであった。

例文 3.3.1-3

Think about how many people are employed just to solve the language problems in the Union.

訳出 3.3.1-3: ま、おお、多くの人達が、ま、あー、関わってくるというわけで、言語も多様化しているということで、えー、その言語的な..言語の問題を解決するのに どれだけの人を雇わなければならないかというふうなこと、これが大きく、大きな問題であります。

この文の前では、EU が非常に巨大な組織になっていることが取り上げられている。訳出の下線部分の冗語には、被験者の思考過程が反映されているといえる。

例文 3.3.1-4

Today, half a century later, we do not have a United States of Europe, but a highly integrated European Union currently consisting of 15 Member States...

訳出 3.3.1-4: で、えー、このように半世紀も前から始まった運動、色々な動きがあったわけですけれども、ただもう半世紀経って、え、欧州合衆国といったようなものがあるわけでは、できたわけではございません。えー、今、ヨ、欧州統合、連合ということで 15 カ国が...

ここでも最初の下線部分は、原発言でその前に紹介された EU の統合までの経緯を指している。このように文と文の間にある冗語は、ノートを見て次の訳出をするまでの間を埋める“つなぎ“の役割を果たしている。

3.3.2 明示化

訳出で観察された原発言に含まれていない供述または内容は、明示化 (explicitation) であることが考えられる。explicitation という概念は、Blum-Kulka (1986/2000:300) が以下のように説明している。

The process of interpretation performed by the translator on the source text might lead to a TL text which is more redundant than the SL text. ... It follows that explicitation is viewed here as inherent in the process of translation.

明示化とは、1つの言語から別の言語へのトランスレーション (翻訳も通訳も含む上位概念としての) に、常に付随する万有の現象であるといえる (ibid. 302)。被験者の訳出を見ていくと、明示化による結果というべきものがかなり観察される。

例えば、次の2つの例文は、接続詞の“so”に関わるものであるが、いずれの場合も“so”に相当するものはノートされていない。しかしながら、被験者は訳出にあたって前述したものの結末性を持たせている。

例文 3.3.2-1

So the British, for instance, made the decision, not to take part in the single currency...

訳出 3.3.2-1: え、こういった原則をもとにいたしまして、イギリスも、このユーロ単一通貨のユーロには参加しないということを決めました。

この部分の直前では、EU は超国家ではないので、閣僚理事会の決定は実施をする前に国内批准手続きを踏まなければならないということが語られている。

例文 3.3.2-2

So it is inevitable that some movement of labor from the future to the existing Member states will occur.

訳出 3.3.2-2: ま、そういうことを勘案いたしますと、現在のところのこの、おー、加盟国の中に大きな労働移動というものが将来的に起こってくるというふうなことになってくるだ..だろうと思います。

その前の部分では、加盟候補国の賃金レベルは EU のそれよりかなり低いという点が話されている。このように訳出には通訳者の思考過程、言い換えると、どのように原発言を論理づけて理解したかが反映されているといえる。

もう1つ被験者の訳出に多く観察されたものが意味内容の補完である。つまり、通訳者はコミュニケーションの仲介役として、原発言が意図した内容の理解に必要と感じた場合に、原発話にはなかった意味内容を補完するというものである。Blum-Kulka (op.cit.:306) は以下のように説明している。

In translation the translator becomes the judge as to the extent to which he or she finds it necessary to explain the source text's reference network to the target language audience.

通訳者は、原発言の内容を目標言語で適切に表現するだけでなく、意図したものが正しく受け手に伝わるよう、必要とあれば意味を補う。これは、トランスレーションのプロセスでは、受け手に焦点を合わせなければならないとする Skopos 理論 (Vermeer 1978, Reis/Vermeer 1984) にも通じるものである。以下は通訳者により意味の補完がなされた事例である。

例文 3.3.2-3

The countries of Western Europe generally have high environmental standards...

訳出 3.3.2-3: 西ヨーロッパの国々、これ、既存の加盟国ですね、これっていうのは、当然、ま、高い環境基準をもっておりますし...

例文 3.3.2-4

So it is inevitable that some movement of labor from the future to the existing Member states will occur.

訳出 3.3.2-4: しかも賃金レベルがですね、これは当然二つのグループの間で違いがありますので、一旦加盟が実現すれば、労働力の移動が自由になりますから、えー、既存の賃金の、えー、失礼、新しい国の賃金の低い所から既存の加盟国の賃金の高いところへ当然、えー、毎日通勤をする人達が出てくるだろう、もちろん労働力の移動があるだろう..

例文 3.3.2-5

The imminent challenge facing the Union is, of course, its enlargement.

訳出 3.3.2-5: え、さてヨーロッパ連合にとって直近の一番の大きな課題はこのヨーロッパ連合の拡大です。すなわち加盟国の増加です。

例文 3.3.2-6

Today, half a century later, we do not have a United States of Europe,...

訳出 3.3.3-6: え、ま、50年経ちまして、え、まだ残念ながら、あ、ヨーロッパ合衆国というチャーチルが念頭に置きましたものはできておりません。

上記の例文 3.3.2-1~3.3.2-6 の下線部分は、原発言の意図を明確にするために被験者によって補われた部分である。被験者は、原発言をそのまま訳すだけでなく、聴衆にとって馴染みのない内容を理解しやいよう意味を補完している。このような通訳者による意味の補完は訳出に頻繁に見られた。

3.3.3 パラフレーズ

被験者の訳出にはパラフレーズも見受けられた。通訳者がパラフレーズするのは、1つには相応する目標言語の表現が思い浮かばなかった場合がある。もう1つは、目標言語にその概念に相応するものが全く存在しない、また、たとえ存在していても、目標言語の文化圏または聴衆の間ではあまり知られていないため、意図されたものが正しく伝わらないと通訳者が危惧した場合である。後者は、3.3.2の明示化で示した通訳者による意味の補完に近いものである。パラフレーズは、情報を落とさず訳しにくい概念を伝える通訳技術の1つであるが、訳出は長くなる。原スピーチの以下の概念は訳出が困難であったようである。

例文 3.3.3-1

However, due to its geographical location, Austria is suffering from heavy transit traffic between North and South as well as East and West.

訳出 3.3.3-1: ただ、どうしてもこの地理的な条件というところから、ヨーロッパの中心にあるために、ひが...北と南との間の人々の移動、あるいは東と西に人々が移動するときには必ずこの国を通らなければならない、通過点にならなければならないということで、そういった移動がどうしてもこの国を通らなければなりません。

“transit traffic“ は、ヨーロッパでは頻繁に耳にするが、この概念に対応する日本語の表現、「通過交通」は、聞きなれない言葉であり、日本では当然ながら国境をまたぐ“transit traffic“ はない。被験者のいずれもこの表現を使っていない。

例文 3.3.3-2

“Austria is a landlocked country, surrounded by eight neighboring countries...”

訳出 3.3.3-2a: そして海がありませんので、つまり、ま、陸地に囲まれている国であります、8カ国に囲まれているわけでありまして。しかもその8カ国というのは...

訳出 3.3.3-2b: えー、周りを、おー、に全く海がない、いわゆる大陸の中に閉じ込められているような感じで、え、位置する国であります。

対応する日本語の「内陸国」という表現を使っているのは S3 だけで、これを再現した4人の被験者はこれを説明する形で言い換えている。

例文 3.3.3-3

And thus put the whole arrangement into doubt.

訳出 3.3.3-3a: で、これから財政の健全化が要求されるというこのことはひょっとしたら将来、えー、どうなるだろうかという、えー、ま、えー、感じが出てきていくところでもあります。

訳出 3.3.3-3b: このヨーロッパ、連合の財政的な基盤、が安定しているというのがユーロの、統合の不可避な条件であるというその基盤自体でさえ疑問を投げかけていくという状況にあります。

原発言の“arrangement“ という表現は非常に訳し難い概念である。これは、その前に言及した、通貨同盟に参加するために、加盟各国がいわゆる収斂条件（convergence criteria）を満たしていなければならないという点を指している。この文を再現できた4名の被験者はこれを正しく解していた。S3 は、これを「体制自体」という表現を

選択し、他の被験者は説明する訳出をしている。

3.3.4 順送りの訳

これまでの例文で見えてきた現象は、いかなる通訳のプロセスにも付随するものである。一方、次に言及する順送りの訳は、特に、英日通訳に大きな意味を持つ。順送りの訳というのは、できるだけ原文の流れに沿って訳出していくことを言い、特に、英語 (S-V-O 構造) と日本語 (S-O-V 構造) のように語順が大きく異なる言語間での同時通訳では不可欠とされる通訳技術である。日本語では、「訳し下し」(國弘・西山・金山 1969)、「頭ごなしの訳」(松本・向・鎌田 1976、小松 2003)、または「順送りの訳」(篠田・新崎 1990、水野 1996) または「FIFO」(松本他 1976、小松 2003) と称されている。英語の文献では、例えば、“chunking”、“saucissonage” (Ilg 1978)、“preserving linearity” (Zhong 1984) (ともに Setton 1990)、“salami technique” Jones (1998) と呼ばれている。

興味深いことに、この通訳技術がこの英日逐次通訳の実験においてもかなり頻繁に観察されたのである。逐次通訳では、通訳者は原発話を最後まで聞くことができ、訳出にあたっては時間を制限されないため、これは意外ともいえる結果であった。また、國弘・西山・金山 (1969) のように、「[逐次通訳では、]日本語としてできるだけ自然なことばを選び、日本的な順序に従って、全体の構成を再編成する必要もある」という意見もある。確かに、原文が長かったり文章構造が複雑であったりした場合は、原文の流れに沿いながら、句といった比較的小さい単位で確実かつ明瞭に訳出していくことは賢明といえる。一方で、順送りの訳をすることで、多くの場合、少なくとも結束性をもたせるために、すでに述べたことに対する関連付けと、相応する述部といったものが必要になるため訳出が長くなりがちである。

また、被験者の訳出には、直前に訳出したことの繰り返しが頻繁に見られた。このような繰り返しは、順送りに訳出していきながら、起点言語の文章構造では後置されていた情報で、日本語の文章構造ではもっと前に組み入れるべきものがあつた場合に起きているようである。こういった繰り返しは、順送りの訳出の結果である一方、視点を変えれば、順送りの訳はある情報が目標言語の文構造にうまく組み入れられなかった結果ともいえる。以下では、問題となった修飾部に下線、訳出においてそれを組み込むべき箇所括弧、情報の繰り返しとなった箇所に波線を入れてある。

例文 3.3.4-1

Since January 1, 2002 no money exchange is needed when you travel within the so-called Euro-zone of 12 countries.

訳出 3.3.4-1a: 2002 年の 1 月 1 日以降、このような、え、単一の通貨、ユーロを使っている [] 国々の間では、もうすでに自国の硬貨を、あるいは自国のお金を他の国のお金に替えることなくお金を使うことができるようになりました。このようなユーロが使えるゾーン、域というのは、今、約 12、現在 12 カ国あります。

訳出 3.3.4-1b: 2002 年の 1 月 1 日をけっして、期して、いわゆる、ま、[] 為替の交換というものがなくなっただけでありまして、12 カ国のユーロランドというふうについておりますけれども、ユーロランドあるいはユーロゾーンとっておりますけれども、その中では、え、完全に、ま、通貨が一つに統一をされたわけなんです。

訳出 3.3.4-1c: 2002 年の 1 月から、[....] 全く国から国に移動するときにも、両替をする必要がなくなった、あ、わけです。えー、このヨーロッパの対象ゾーンとしては 12 カ国をそうしてお金を交換しなくても、お、1 つの通貨で使えるようになりました。

訳出 3.3.4-1d: 2002 年 1 月 1 日から、え、この域内の 12 カ国のユーロ圏の中では、一切この通貨の交換ということが必要なくなりました。

この文では 4 名の被験者が順送りで訳出しているが（順送りの訳の例：訳出 3.3.4-1a から 3.3.4-1c）、いずれも when 以下の副文の前で区切っている。被験者のノートにはいずれも《January 1, 2002》、《no money exchange》、《Euro-zone》、《12 countries》に相応する要素が見られる。順送りでない訳出をした S3（訳出 3.3.4-1d）は、被験者の中で唯一、原発言の前置詞 “within” に対応する 《in》 もノートしていた。

例文 3.3.4-2

Another issue which I would like to draw your attention to is a nuclear power plant in the Czech Republic that has recently been put into operation.

訳出 3.3.4-2a: え、そしてもう一つ別の問題といたしまして、[] 原子力発電所の問題があります。チェコ共和国では最近原子力発電所が稼動しました。

訳出 3.3.4-2b: え、もう一つ、懸念材料となっているのが、最近稼動を始めましたチェコにあります原子力発電所です。

この関係詞句であるが、正しく再現できたのは2名の被験者（S3, S4）だけであった。S4は順送りで（3.3.4-2a）、S3は順送りでなく（3.3.4-2b）訳出した。他の2名の訳出では、ノートにはこれに相応する要素があるにもかかわらず、この下線部に対応する部分の訳出が抜けていた。残り2名の被験者では意味の逸脱があり、1名は、《近》と《open》をノートしていたが、recentlyに相応すべき「最近」の《近》を、訳出では「近々」と読んだために、この原子力発電所が「近々稼働されることになっている」、と訳した。もう1名ではこの部分に対応するノートの要素はなく、「建設計画がある」と訳出している。

例文 3.3.4-3

All the decisions made by the Council of the Ministers consisting of the government representatives of each of the 15 Member States₁ must undergo the process of national ratification before they are implemented₂.

訳出 3.3.4-3a: したがって、[] 欧州連合理事会という、ま、閣僚理事会とも呼ばれますけれども、お、各国政府を代表する15ヶ国₁の代表の大臣級の閣僚級の人達が出てきて色んなものごとを決めることになります。ただその前に、えー、各国内では実施する、う、候補にあがっている政策の批准をまず前もって₂、えー、求めるということをしておく必要があることになっております。

訳出 3.3.4-3b: それぞれの意思決定をする際には、ヨーロッパの閣僚委員会という、え、その、[] それぞれの国の政府の代表が出席している閣議で決めますけれども、そこには15カ国₁の代表が出ていてそこで決めるんですが、そのあと、各国においてその政策を実施するかどうかということも₂、それぞれの国家におきまして批准が必要です。

訳出 3.3.4-3c: え、ヨーロッパの、え、EUの閣僚理事会というのは、その加盟15カ国の代表である閣僚からなる₁組織ですけれども、そちらの方で行われたいかなる決定も各国で批准をするというプロセスを経てから初めて実施されます₂。

この文では、まず、閣僚理事会にかかる修飾部1と、before以下の副詞句2があり、日本語ではこれらにかかる名詞や動詞の前に置かれる。4名の被験者の訳出では、原スピーチの意味がきちんと再現されていた(内1名では名詞修飾部1が欠けていた)。被験者は全て順送りで訳出しているが、S3だけが(3.3.4-3c)、mustの前で区切り、最初に Council of Ministers の名詞句を訳出している。

例文 3.3.4-4

These Central and Eastern European countries have undergone tremendous changes since the fall of the Berlin Wall and the subsequent collapse of Communist governments throughout the eastern region.

訳出 3.3.4-4a: ま、このような国々は、え、ベルリンの壁 [] の崩壊の後、経済的にもまた政治的にもかなり変わってまいりました。で、そのあと、ベルリンの壁の崩壊のあと、東ヨーロッパにおきましては、色々な共産主義の国の変化が起こりましたし、崩壊が起こりましたので、その影響をかなり受けてきております。

訳出 3.3.4-4b: え、これらの中央ヨーロッパ及び東ヨーロッパの諸国はいわゆるベルリンの壁の[] 崩壊後、非常に大きな変化を遂げてきております。また、...
あ、共産党..政権の崩壊後、非常に大きな変化を遂げてきておまして...

訳出 3.3.4-4c: こういった中央そして東ヨーロッパの国々というものは、あー、[] 大きな変遷を遂げてまいりました。すなわちベルリンの壁の崩壊、そして、この東欧を座監しておりましたこの共産主義が崩壊する、したことによりまして、非常に大きな変遷を、あー、遂げてまいりました。

訳出 3.3.4-4d: これら、えー、中央及び東ヨーロッパの国々はベルリンの壁の崩壊、そしてそれに続く東ヨーロッパでの共産党政権の崩壊以来、大きな変化を遂げてまいりました。

ここでは、「ベルリンの壁の崩壊」と並んで since にかかっている and 以下の名詞句が問題となっている。順送りの訳 (3.3.4-4a から 3.3.4-4b) をした被験者のノートでは、この2つの概念の並立関係が必ずしも明らかになっていなかった。

例文 3.3.4-5

And it is not difficult to imagine how hard it is and will be to reach a consensus among the Member States, with each one defending its own interest.

訳出 3.3.4-5a: で、[] いかにもこのように、い、多様な言語をもっていくヨーロッパ連合の中におきまして、えー、今もそうですし、これからもコンセンサスをとることが難しいか、え、それぞれの国が自分の国益を守ろうとする中において、いかに、い、そのコンセンサスを、現在もそうですが、これからもとっていくのが困難であるということがお分かりいただけるかと存じます。

訳出 3.3.4-5b: で、このような難しさはありますけれども、[] それを乗り越えた上で私達は加盟国との間の中でコンセンサスを得ていかなければならない、ところが加盟国はそれぞれに自分の利害を抱えております。それを、ま、克服した上でコンセンサスを得なければならないというのは、これは非常に大変なことであるというのはお分かりいただけるかと思います。

訳出 3.3.4-5c: え、そして、こうした様々な各国がそれぞれの権益を守ろうとしている中でコンセンサスを得ることがどれだけ難しいかは想像いただけると思います。

この例文で注目したいのは原発言では後置されている副詞句である。半分の被験者が順送りで訳出しているが、訳出が長くなっていることは一目瞭然である。

4. まとめ

訳出に要する時間を長くしている要因として、冗語、明示化、パラフレーズ、順送りの訳が観察された⁶⁾。しかしながら、これらの現象は、全被験者の訳出に共通して見られるものではない。例えば、明示化は、特に S1、S2、S6 で、順送りの訳は、S4、S5 で多く観察された。これらは、つまり、個々の通訳者の通訳スタイルや戦略といったものに深く関わっていることになる。6名の被験者の中で唯一、原発言より訳出に要した時間が短かった S3 では、結果としてこれらの現象が特に少なかったといえる。

また、訳出を長くする要因には、日本語逐次通訳における難しさが反映されているといえる。その1つは、語レベルの難しさであり、日本語で相応する的確な表現を探すことの難しさである。特に、起点言語の文化圏では知られるものが、目標言語の文化圏では相応するものが全く存在しない、またはよく知られていない場合には、明示化やパラフレーズが必要になる。

もう一つ、日本語逐次通訳においてこれよりも大きな比重をもっているのが、全ての情報を取り込んだ上で明瞭かつ無駄のない日本語の文章を組み立てることである。S-V-O 構造の言語で後置される修飾句は、日本語では修飾される動詞や名詞の前に置かれなければならない。一方で、S-O-V 構造の日本語は、修飾部分が長くなることで主語と述語が離れすぎるのを嫌う。さらには、場合によっては、原文の意味内容・情報を保持しながらも、全く異なる文章構造で表現した方が分かりやすいことも少なくない。これまで、語順の違いに帰する難しさは、同時通訳との関連においてばかり言及され、逐次通訳では取り上げられていない。

これは、逐次通訳では同時通訳と異なり、訳出の時間は原発言に左右されないからであり、通訳者は原発言を最後まで聞くことで理解を深め、情報を整理できるからである。しかしながら、逐次通訳で通訳者に考えている時間は実際にはほとんどない。

逐次通訳の第一段階では、原発言を聞きながら分析しノートしていくが、これは原発言の発話速度や内容に大きく左右される。原発言に例えば、列挙といったどうしてもノートすべきものが続いたら、ノートに書き留めるという機械的な作業を行うため、時間のプレッシャーは一挙に高くなり、同時通訳以上になる。原発言を最後まで聞いて理解した上でノートできるのは稀で、むしろ比較的小さな単位で意味内容を確認しながらノートし、これらに関連付けていくという作業になる。第2段階では、ノートを読みながら目標言語における適切な表現で内容を過不足なく再現していくわけだが、原発言による時間的な制限はないにしろ、聴衆の期待を一身に浴びている逐次通訳者にはここで考える余裕は実際にはほとんどない。ノートをすばやく読み取りながらの訳出、そして訳出には完全さや流暢さが求められる。そういった意味で、ノートは確かに記憶を補完するツールでもあるが、それ以上に、ノートの役割は、冗語がなく、論旨が分かりやすく、かつ流暢な訳出を助けるべきものでなければならない。少なくとも、上記の現象の中で、つなぎの目的でなされた冗語（直前に述べたことの繰り返し）や情報を後から補うために行われた順送りの訳は、一目で文の構造や論旨が明確に分かるノートによって避けることができると思われる。そのためには、逐次通訳では、第1段階では実際に訳出する必要はないにしろ、どのように訳出するかというプランニングまでノートテーキングの時点で完了していることが望まれる。

5. 今後の研究課題

本稿では取り上げることができなかったが、被験者のノートを取るタイミングを見ると、そのタイムラグ（ある語が発声されてからノートを取るまでの時間）は、原則としてかなり短く、2～3秒ないし4秒程度であった。つまり、逐次通訳の少なくとも第一段階では、同時通訳の場合と変わらないか、それより小さな意味単位で情報を処理し、これらに関連付けていっているといえる。これは被験者のノートにおける要素の区切りやグループ化からも明らかに見てとれる点である。

また、レベルの差はあるだろうが、どの被験者もノートの時点で目標言語における表現を探っているといえる。被験者がノートした言語の割合を見ると、1名を例外として⁷⁾、目標言語（＝日本語＝母語）によるノート要素の割合が、起点言語（＝英語）によるものを上回っている。特に、S3では、目標言語の割合が64%で、起点言語の16%（非言語の要素が20%）を圧倒的に上回るとともに、句レベルで日本語の語順でノートされているものも観察された。つまり、ここで考えたいのが、逐次通訳の第一段階では、少なくとも入ってくる情報の処理という点では、同時通訳とほとんど変わらないのではなかろうかという点である。

もう1つ取上げたいことが、このケーススタディーを見る限り、日本語逐次通訳における訳出漏れや意味のずれは、相応する箇所のノートが欠落または不足していることに起因するというよりは、ノートの要素は十分にあって、それらを手がかりに原発言の内容を目標言語で的確に再現できなくなっているケースの方が多いという点で

ある。結果として、1文がそのまま抜け落ちるより、意味のずれが生じたり、冗語が加えられたりしているケースの方がはるかに多くなっている。この原因としては、ノートが原発言を表面的に捉えただけであったか、訳出の段階でノートが解読できなかったか、または情報を保持した上で適切に表現できなかったことが考えられる。いずれにしてもノートは本来の役割を果たさなかったことになる。通訳者が記憶に頼って原発言の内容を再現しようとすることで通訳者の解釈が加わる。これは Taylor (1989)、Jones (1998) も指摘する点である。つまり、記憶に頼ることで冗語が訳出に加わる可能性は高くなるのである。

逐次通訳のノートについては、その多くが経験に基づく様々な意見が出されているが、現在のところその主流は、個々の通訳者が自分で使いやすいパターンを開発すべきであるというものである。しかしながら、この実験的ケーススタディーの結果を見る限りでは、第1段階で通訳のプロセスをほぼ完了させ、第2段階ではできれば訳出だけに集中する方が得策のようである。そう仮定した上で、同時通訳と同じく原発話によって時間が制限されている逐次通訳の第1段階で、何をどのようにノートに取るべきなのか。この点については、著者の研究においてもいくつかヒントになるものがあったが、いずれにしてもさらに実証的な検証を重ねる必要がある。

逐次通訳実験に先立ち、日本語通訳者を対象に逐次通訳とノートについてアンケート調査を実施した。その中で「原文に忠実であることか、それとも短く簡潔を得たものであるか、あえていうならそのどちらが重要か。」という設問をした。これは日本語の逐次通訳ノートに関する文献で、詳細部分にとらわれてはならないという意見が頻繁に見られたためである。欧州言語の逐次通訳では原文に忠実であることを大原則としていることから、根本的な違いがあるのだろうかという疑問からであった。これには実に様々な意見が寄せられたが、少なくともこのケーススタディーの被験者の訳出を見る限り、詳細まで原文に忠実に再現していることは明らかである。しかしながら、日本語逐次通訳は、本稿で見てきた要因により、ともすれば訳出が長くなりがちである。そういったところで、日本語逐次通訳者は、全ての情報を保持しながらも明瞭簡潔な訳を心がけなければならない、というのが真相ではなかろうか。

【謝辞】博士課程の研究にあたり、長きにわたり専門的な幅広い知識をもって様々な角度からご指導くださったウィーン大学の Franz Pöchhacker 准教授に心より感謝いたします。また、アンケート調査で水野 的副会長・事務局長に、通訳実験で学会理事兼顧問、大東文化大学の近藤正臣教授に多大なご助力をいただきました。最後に、かけがえのないデータを提供してくださった被験者の方々、調査にご協力いただいた会員の皆様に改めて感謝申し上げます。

著者紹介：松山晶子 (Frey-Matsuyama, Shoko) ウィーン大学翻訳通訳学科 (現 Center for Translation Studies) の翻訳分野 (独・日・英) で修士課程修了。フリーの通訳者・翻訳者として業務に従事。2007年10月逐次通訳ノートに関する研究で同大学より博士号を取得。ドイツ公認通訳者・翻訳者。連絡先: s.frey-matsuyama@kotoba.eu

【註】

- 1) Kalina (1986) は、欧州市場における逐次通訳需要は、全通訳の需要の 25% をはるかに下回る程度であるとしている。また、1996年の AIIC の調査によると、年間 25 日以上逐次通訳を行っているのは、逐次通訳を行う会員通訳者の僅か 9% という数字が出されている。
- 2) 著者の日本語通訳者を対象としたアンケート調査結果 (2002) によると、通訳の形態と年間の頻度について、大半が逐次通訳と答えた通訳者が 32%、逐次と同時通訳がほぼ同程度と答えた通訳者が 39% であった。つまり日本語通訳者の約 3 分の 2 が少なくとも同時通訳と同程度に逐次通訳を行っていることになる。
- 3) ノート 1 ページ分の見落としがあったため、データから外している。
- 4) 本稿では、発話速度を 1 分あたりのモーラ数で表している。モーラは発音時間の長さを表す単位であり、拍とも呼ばれる。促音 (っ) や撥音 (ん) は単独では音節を構成することはできないが、発音時間が通常の音節と同等なので 1 モーラとして数えられ、長音 (ー) は 2 モーラとして数えられるという違いがある。
- 5) ノート 1 ページ分の見落としがあったため、数字が低くなっている。
- 6) 観察された現象は、必ずしもこれらのカテゴリーの 1 つに分類すべきものではない。
- 7) ノートの要素は、目標言語 37%、起点言語 49%、非言語 14% であった。

【参考文献】

- AIIC (1996). The 1996 statistical report. *AIIC Bulletin*, 25 (10): 36-45.
- Andres, D. (2002). *Konsequativdolmetschen und Notation*. Frankfurt a M: Lang.

- Blum-Kulka, S. (1986/2000). Shifts of Cohesion and Coherence in Translation. In L. Venuti (Ed), *The Translation Studies Reader*, 298-313.
- Herbert, J. (1952). *The Interpreter's Handbook*. Genève: Librairie de l'Université Georg.
- Jones, R. (1998). *Conference Interpreting Explained*. Manchester: St Jerome Publishing.
- Kalina, S. (1998). *Strategische Prozesse beim Dolmetschen: Theoretische Grundlagen, empirische Fallstudien, didaktische Konsequenzen*. Tübingen: Gunter Narr.
- Kalina, S. (1986). Das Dolmetschen: Theorie und Praxis. *TexTconText*, 1: 171-192.
- Reis, K. & Vermeer, H. J. (1984). *Grundlegung einer allgemeinen Translationstheorie*. Tübingen: Niemeyer.
- Taylor, C. (1989). Textual Memory and the Teaching of Consecutive Interpretation. In L. Gran & J. Dodds (Eds), *The Theoretical and Practical Aspects of Teaching Conference Interpretation*. Udine: Campanotto Editore. 177-184.
- Setton, R. (1999). *Simultaneous Interpretation: A Cognitive-pragmatic Analysis*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- Vermeer, H. J. (1978.). Ein Rahmen für eine Allgemeine Translationstheorie. *Lebende Sprachen*, 3: 99-102
- 國弘正雄・金山宣夫・西山千 (1969) 『通訳：英会話から同時通訳まで』 日本放送出版協会
- 小松達也 (2003) 『通訳の英語 日本語』 文藝春秋社
- 篠田顕子・新崎隆子 (1990) 『今日からあなたの英語は変わる!』 日本放送出版協会
- 松本兼太郎・向鎌治郎・中沢弘雄 (1976) 『通訳教本・英語通訳への道』 大修館書店
- 西山 千 (1988) 『英語の通訳』 サイマル出版会
- 水野 的 (1996) 「逐次通訳の理論のために」 『通訳理論研究』 第 11 号: 16-26.
- 米原万里 (1994/1998) 『不実な美女か貞淑な醜女か』 新潮文庫